

3-4. ストーリー D

■炭鉱と農業・集治監と石狩川流域開発

北海道開拓を進める上で、道路建設や産業生産を担う人材が不足していた。一方、明治維新で成立した新政府に対して、不満を持つ士族の反乱が各地で発生した²⁹。人手不足と囚人激増を一気に解決するために、北海道に2つの集治監（監獄：現在の刑務所に相当する施設）が開設され、刑期12年以上の重罪犯が押送された。

そもそも集治監は、1879（明治12）年に内務卿・伊藤博文が太政大臣・三條実美^{さんじょうざねとみ}に提出した建議書によって設置が決定した。その内容は「社会を乱した凶悪犯や政治犯たちは、ただ徒食させることは許されない。ロシアへの備えの意味からも開拓が急務である北海道に送り込んで、開墾や道路建設などにつかせるのが良い」というもので、単なる矯正施設としてではなく、初期の北海道開拓の中に組み込まれた存在であったことが特徴である。

1881（明治14）年、北海道最初の収監施設として樺戸集治監（月形）が設置され、主として農地開墾や道路開削を担った。翌1882（明治15）年には、空知集治監（三笠）が設置され、官営幌内炭鉱の採炭を担った。

開設当初の基本的な役割に一大変革をもたらしたのが、1885（明治18）年の太政官大書記官・金子堅太郎^{かねこけんたろう}による建白書であった。1882（明治15）年に開拓使が廃止され、三県一局（札幌県・函館県・根室県・農務省事業管理局）となったが、縦割り行政の不効率さや、大蔵卿・松方正義^{まつかたまさよし}の緊縮財政（松方デフレ）などによって、開拓事業が停滞していた。この状況を打開するため、伊藤博文の側近であった金子が北海道各地を視察し、「北海道三縣巡視復命書」を提出した。金子は、札幌農学校・豊平館・葡萄酒製造・師範学校などを植民地にとって過大な存在である³⁰と指弾したばかりか、「囚徒らは道徳にそむいている悪党であるから、懲罰として苦役させれば工事が安く上がり、たとえ死んでも監獄費の節約

になり、一挙両得である」³¹ という意味の主張をした。

1886（明治19）年に三県一局が廃止となり北海道庁が設置され、樺戸集治監は道庁長官の指揮下に編入された。金子と同様の考えを持っていた初代長官・岩村^{いわむら}通俊^{みちとし}は、空知集治監のある市来知^{いちきしり}～忠別太^{ちゅうべつと}（現在の旭川）間88kmを結ぶ上川仮道路³²の開削を命じた。

上川道路は、市来知^{そらちぶと}～空知太（現在の砂川空知川河畔）を空知集治監が、空知太～忠別太を樺戸集治監が担当し、囚人200人を一団として3里ごとに外役所を設けながら、突貫作業で進められた。わずか4カ月あまりで仮道が開通、翌1887（明治20）年から本工事が行われ3年ほどで全線開通した。さらに続いて旭川～網走間217kmの北見道路の工事が進められたが、囚人労働史上最も悲惨な事例とされている。

樺戸・空知の両集治監を結ぶ樺戸道路も、1887（明治20）年に建設された（⇒図表3-24）。

図表3-24 樺戸道路の工事を記録した絵図



31 彼等ハ、固ヨリ暴戾^{ぼうれい}の悪徒ナレバ、其苦役二堪ヘズ斃死スルモ、尋常ノ工夫ガ妻子ヲ遺シテ骨ヲ山野ニ埋ムルノ惨状ト異ナリ、又今日ノ如ク、重罪犯人多クシテ、徒ラニ国庫支出ノ監獄費ヲ増加スルノ際ナレバ、囚徒ヲシテ、是等必要ノ工事ニ服従セシメ、若シ之ニ堪ヘズ斃死シテ、其人員ヲ減少スルハ、監獄費支出ノ困難ヲ告グル今日ニ於テ、萬己ムヲ得ザル政略ナリ。又尋常ノ工夫ヲ使役スルト、囚徒ヲ使役スルト、其賃錢ノ比較ヲ挙げバ、北海道ニ於テ、尋常ノ工夫ハ、概シテ一日ノ賃錢四拾錢ヨリ下ラズ。囚徒ハ、僅ニ一日金拾八錢ノ賃錢ヲ得ルモノナリ。然ラバ則チ、囚徒ヲ使役スルトキニハ、此開築費用中、工夫ノ賃錢ニ於テ、過半数以上ノ減額ヲ見ルナラン。是レ実ニ、一挙両全ノ策ト云フベキナリ。

32 上川道路は、1887（明治20）年に公表された全道基幹道路計画の一部をなすもので、(1)札幌を起点として空知・上川から釧路・根室にいたる道路、(2)樺戸から日本海側の増毛にいたる道路、(3)釧路から網走に至る道路の新設がうたわれていた。

29 1874年 / 佐賀の乱、1876年 / 神風連の乱（熊本）・秋月の乱（福岡）・萩の乱（山口）、1877年 / 西南戦争など。

30 最も植民地ノ急務ヲ鑑ミザルモノト云フベキナリ。

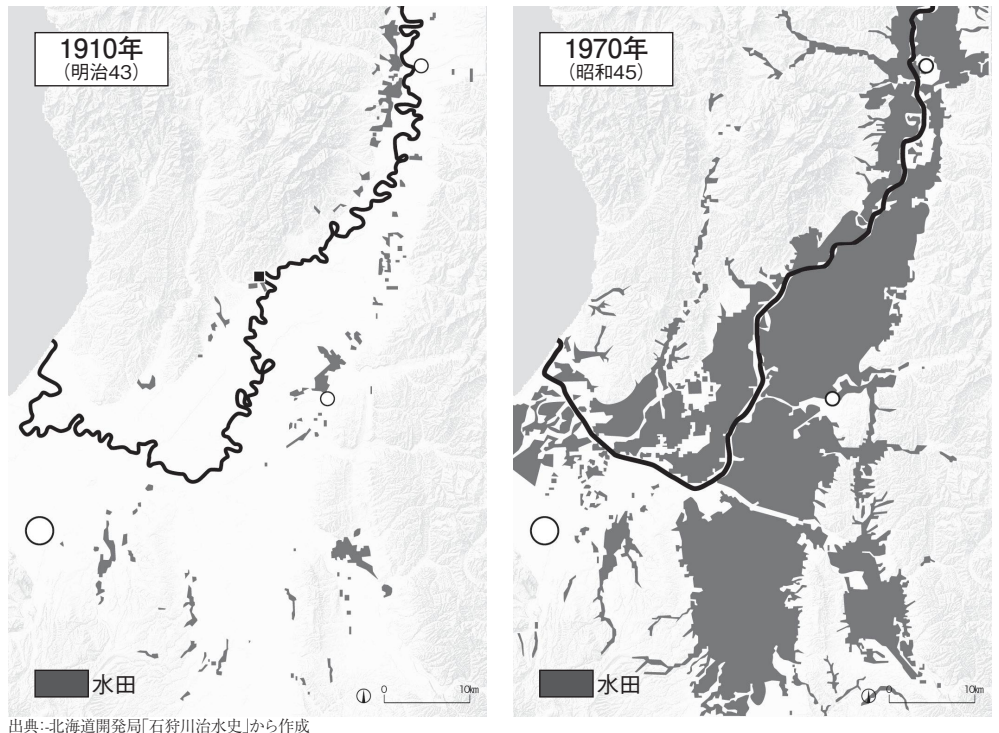
これによって、石狩川舟運に頼らざるを得なかった樺戸集治監の交通環境は、樺戸道路と幌内鉄道の乗り継ぎが可能となり一気に改善された。

行刑政策転換により道路建設が集治監の主務となってから囚人労働が終わるまでの十数年の間に、北海道の交通基盤は一気に整ったのである。

そもそも、設置当初の樺戸集治監では、原始林を切り開き農地を造成することを最大の目的としていた。しかし、単に木を切るだけでは、泥炭地である石狩平野を穀倉地帯にすることはできない。蛇行する石狩川の流れを直線にし、泥炭と土を入れ換える客土を行い、用水・排水の施設を作るという、長期的な事業が不可欠であった。

そのため、1903（明治36）年に集治監制度が廃止された後も、農地開発は国や北海道に引き継がれ、総合的な治水対策と両輪で続けられた。これらの農業基盤整備と治水対策は、単に農業だけではなく、洪水の危険性を低下させ、都市住民にも安全な暮らしをもたらした。集治監の囚人がスタートさせた農地開発は、わずか100年で、石狩平野の姿を原始林が茂る泥炭地から、おいしい北海道米の一大産地へと変えたのである（⇒図表3-25）。

図表 3-25 石狩川河川改修と水田面積の拡大



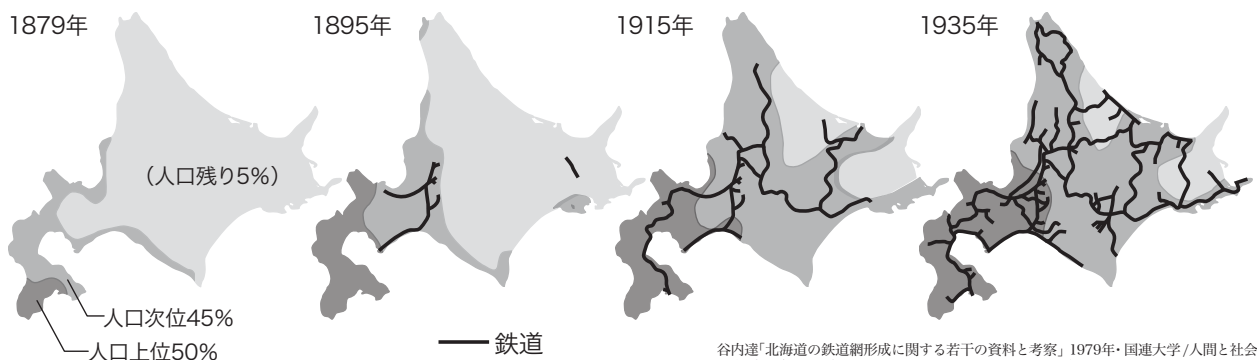
■《炭鉄港》から全道への波及：鉄道と内陸開発

北海道の人口分布を見ると（⇒図表3-26）、鉄道開通直前の1879（明治12）年の人口の上位50%は近世から開発が進んでいた渡島半島南部（松前・江差・函館の一带）に限定されており、次位45%の人口も渡島半島と沿岸部に集中していた。

官営で手宮～幌内間が、北炭により歌志内・空知太～室蘭間の鉄道が開通され、岩見沢を交点に東西－南北の鉄道網が形成されると、1895（明治28）年の人口分布の次位45%は、鉄道沿線を主体に一気に石狩平野全体に拡大した。北炭の鉄道路線は、開拓に直接関係ある移住民の無賃輸送、農作物の減免が払い下げ条件として付されており、開拓の推進に大きく貢献した。

鉄道国有化後の1915（大正3）年時点で、北炭時

図表 3-26 鉄道発達と人口分布の変化



代の小樽・札幌・室蘭に加え函館・旭川・釧路・北見という道内主要都市のネットワークが完成したことから、人口上位50%の範囲は札幌付近まで拡大、次位45%の範囲は鉄道に沿って広がりを見せた。1935（昭和10）年には、ほぼ全道を網羅する鉄道網が完成し、人口下位5%の人口希薄地帯はオホーツクと根釧の一部にまで縮小した。

このように、鉄道の延伸とともに、人口が定着するプロセスを明快に読み取ることができ、内陸部の開発にとって鉄道が果たした役割を理解することができる。

その鉄道ネットワークの基本となったのは、北炭時代に完成した東西-南北の鉄道にほかならない。そのため交点となった岩見沢は、その後長らく鉄道の要衝として重要な地位を占めた。

さらにこれを遡ると、開拓使が建設した幌内鉄道が基となる。開拓使黒田長官は、1879（明治12）年2月に鉄道建築兼土木顧問としてアメリカから着任したクロフォードに対し、幌内鉄道は「将来、順次延長して海岸にも達し北海道全道に敷設すべき鉄道と連絡させるものであるから、その路線設定にあたっては、よろしくこの点に注意されたい」「アメリカの例にならって鉄道を作るが、日本にとって初めての例なので将来の模範となるよう計画すべき」と訓令した³³。黒田の言葉から、長期的な将来を見通した開拓政策の発想と、開拓の実験的・模範的な性格の一端を伺うことができる。

■ルーツが同じで全道に波及…甜菜糖業

1878（明治11）年、パリ万博に派遣された勸農局長・松方正義は、西欧諸国での甜菜糖業の隆盛を目の当たりにし、日本への本格的な導入を決意した。元薩摩藩士の松方は、藩領の奄美諸島で行われている甘藷（さとう）製糖の知識があったことが発想に結び付いたと考えられる。

帰国した松方が甜菜糖業の導入に奔走した結果、1881（明治14）年に紋龍村（伊達紋別）で官営製糖工場・紋龍製糖が操業を開始した。1887（明治20）年に伊達邦成に払い下げられ、紋龍製糖（株）が設立された。

一方、紋龍製糖の成績から札幌にも製糖工場を建設

する構想が生まれ、1888（明治21）年に札幌製糖（株）が設立され、1890（明治23）年に操業を開始した。原料確保のため、空知集治監の既耕地233haの払い下げを受け直営農場とし囚人労働力での費用低減を図ったほか、札幌周辺の屯田兵村でも甜菜の栽培を奨励した。

しかし、台湾領有による甘藷糖の成長、交通基盤未発達による運搬費用の増高、有畜農業が未発達で本来は家畜に給餌するビート副産物の利用がされなかったことなどから行き詰まりをみせ、紋別は1896（明治29）年、札幌は1901（明治34）年に解散し、札幌製糖所の建物はビール工場に転用された（現在の札幌ビール園）。

松方正義の夢は破れたが、正義の九男・松方正熊は、帝国製糖社長として、父・正義の志を継いで甜菜糖業の企業化を企画し、機が熟するのを待っていた。

第一次世界大戦（1914-1918）によって、甜菜糖産地である欧州が主戦場となり砂糖価格が暴騰、台湾の甘藷製糖は増産のための耕地面積は限界に達し、再び北海道での甜菜製糖が注目された。1919（大正8）年、松方正熊が興した北海道製糖が帯広に、翌年に明治製糖系の（旧）日本甜菜製糖が清水に工場を開設した。両社とも明治期の失敗を踏まえ、コンパクトなビート原料ゾーンの形成と輸送円滑化を甜菜製糖の要諦として、直営農場経営と契約栽培、軌道経営（十勝鉄道65km、河西鉄道40km）で対策した。

甜菜糖業は20年ぶりに復活したが、期待に反して両社とも創業直後から早くも経営難に陥るなど、苦難の道を歩んだ。しかし、1927（昭和2）年にスタートした北海道第二期拓殖計画において、冷害に強いビートが奨励され、低開発地域に酪農と結合した寒冷地畑作農業を確立しようとした。当初、明治製糖は由仁・

図表 3-27 日本甜菜製糖機分内工場跡に残る取卸施設



33 蓋シ幌内ノ鉄道線路ハ従来漸次ニ延長シ海浜ニモ敷達シ終テ 全道ニ造ルベキ鉄道線路ト連絡スヘキモノニ付線路ノ経ルベキ所を定ムルニ宜ク此意を體スベキナリ（中略）抑モ米國ノ風ニ倣ヒ鉄道等ヲ我國ニ開クハ之ヲ以テ嚆矢トス 實ニ将来ノ模範トナル可キヲ以テ宜ク躰認シテ計權アルベシ

栗山付近に、北海道糖業は北見に工場建設を希望したが、北海道長官・佐上信一さがみしんいちの強力な指導によって、1935（昭和10）、天北原野てんぼく・根釧台地こんせんでの農業の先兵として士別（明治製糖）と磯分内いそぶんない（標茶：北海道製糖）に製糖工場が建設された。

太平洋戦争が勃発すると、農業は軍需作物や主食の生産に集中され、甜菜糖業は再び原料不足に陥り、1944（昭和19）年に両社は国策によって合併し北海道興農工業（戦後の1947年に日本甜菜製糖株式に社名変更）となり、清水製糖所は製糖を取りやめ航空燃料のブタノール工場に転換する途中で終戦を迎えた。

終戦を迎えると、台湾での甘藷製糖設備を一切失い、甘味資源は甜菜製糖に頼らざるを得ない状況となったが、直営農場の農地解放や食糧難の中で、甜菜栽培は低調に推移した。1952（昭和27）年に砂糖の統制が解除された途端に砂糖価格は一気に暴落し、低廉な輸入甘藷糖に対抗できない事態となった。甜菜栽培の全滅は、北海道畑作の基本である輪作体系（甜菜を中心に小麦・イモ・牧草・豆・トウモロコシなどを毎年場所を変えながら栽培し地力の回復を図る農法）の崩壊につながることから、1952（昭和27）年に議員立法で「てん菜生産振興臨時措置法」が成立し、国による保護政策が確立された。

同法成立によって安定化の見通しがついた北海道の甜菜糖に対して、三白景気（三白＝砂糖・セメント・硫酸肥料）で活況を呈していた甘藷製糖各社による参入競争が過熱した。日本甜菜製糖を含む12社が新工場建設を計画したが、1963（昭和38）年の粗糖輸入自由化によって一挙に甘藷製糖会社の経営が悪化しブームは沈静化した。それでも、終戦直後に日本甜菜製糖の1社3工場であったのが、最終的に3社8工場³⁴になって現在に至っている。

薩摩藩の松方正義によってスタートし、官営事業として展開、集治監と微妙に関係しながら民営化されたが一時は生産が途絶。その後、第一次世界大戦を契機に再開し、国策によって原料不利地域に工場建設を余儀なくされ、さらに第二次世界大戦で苦境に陥り、国策によって安定と過当競争が繰り返されてきた。今日、美瑛や十勝のグリーンフィールド（畑の緑）が観光面で着目されているが、その景観を形成しているのは畑

作農業であり、その最も機軸にあるのが甜菜栽培である。また、北海道の甘味には、甜菜糖が欠かせないものとなっている。

《炭鉄港》と同じような出自で、同様に国策に翻弄された波乱万丈の経緯を経たにもかかわらず、現在も甜菜糖業は継続している。《炭鉄港》と甜菜糖業の対比は、《炭鉄港》に違った視角からの知見を与えるものであろう。

34 日本甜菜製糖：士別、美幌、芽室（帯広は芽室に統合、磯分内はホクレンに売却し廃止）、北海道糖業：北見（←芝浦製糖）、本別（←大日本製糖）、道南（伊達 / ←台湾製糖）、ホクレン：清水、中斜里（←日甜磯分内の原料区域を継承）

3-5. 《炭鉄港》にかかわる人物¹

これまで述べてきたストーリーに登場する（関連する）人物について、その経歴の概略と《炭鉄港》とのかわりについて、分野ごとに分類して以下に一括して整理する。

■薩摩藩関係

しまづなりあきら 島津斉彬 (1809-1851)

江戸時代末期の薩摩藩第11代藩主、島津家第28代当主。島津斉興の子。藩政改革・富国強兵策を推進。反射炉や機械工場などの日本初の近代工場群である集成館を設立した。藩主としての期間は7年にすぎなかったが、西郷隆盛・大久保利通など明治維新で活躍した人材を見出し登用し、福井藩主・松平春嶽から「英明近世の第一人者」と称された。北海道開拓についての必要性を提言し、死後も家臣たちに影響を与えた。

しまづひさみつ 島津久光 (1817-1887)

島津斉興の子。斉興の長子である斉彬との家督争いに敗れるが、1858（安政5）年に斉彬が没し自身の長子・忠義が第12代藩主になると、国父として藩の実権を握る。公武合体運動の中心的な存在となり、1862（文久2）年藩兵千余を率いて上京し尊攘激派を抑える一方、江戸へ下り幕政改革を推進。帰途、生麦事件を起こし、薩英戦争の引金となる。維新後、左大臣に迎えられるが、政府の欧化政策に反対し辞官、郷里に隠棲。斉彬の遺志を継ぎ集成館事業を復活させたほか、薩英戦争の和平交渉ではイギリスと親密となり、留学生派遣、紡績機械の輸入や技師招聘を行った。

くろだきよたか 黒田清隆 (1840-1900)

父は鹿児島藩士。薩長連合の成立に寄与。戊辰戦争では五稜郭の戦いを指揮し、敵将榎本武揚の助命に奔走。維新後は、開拓次官、北海道開拓長官（3代）として、札幌農学校の設立、屯田兵制度の導入など北海道開拓の基礎を築く。のち農商務大臣・総理大臣など歴任し、大日本帝国憲法の発布式典にかかわった。

さいごうつぐみち 西郷従道 (1843-1902)

父は鹿児島藩士。長兄・隆盛の影響で尊王攘夷運動に参加。戊辰戦争に従軍後、新政府に出仕。1874（明治7）年陸軍中將として台湾出兵を指揮。西南戦争

では隆盛側につかず、政府に残留。1882（明治15）年に開拓長官（4代：同年に開拓使廃止）のほか、文部卿、陸軍卿、農商務卿を歴任。1885（明治18）年に内閣制度が創設されると、第1次伊藤内閣の海相に就任。海相在任は通算10年に及び、海軍の整備、改革に尽力した。

ながやまたけしろう 永山武四郎 (1837-1904)

元薩摩藩士。戊辰戦争に従軍し、1871（明治4）年に陸軍大尉に任命、翌年に開拓使出仕。1887（明治10）年、屯田兵第一大隊長となり堀基準陸軍大佐のもと西南戦争に従軍。屯田兵制度の導入に尽力し、「屯田兵の父」といわれた。のち北海道長官（2代）、第7師団長などを務めた。岩村通俊（いわむらとしみち）とともに、上川への北京設置、上川離宮開設を建議した。

ほりもとい 堀基 (1844-1912)

元薩摩藩士。勝海舟から航海術を修め、鳥羽・伏見の戦いで戦功があった。1869（明治2）年に開拓大主典、その後に準陸軍大佐、開拓判官兼開拓大書記官となり、西南戦争では屯田兵を率いて九州を転戦した。1882（明治15）年に官民合同の海運会社である北海道運輸会社設立にあたって社長となり、1886（明治19）年に北海道庁に理事官として復帰。1888（明治21）年に永山武四郎が北海道長官に就任すると理事官を辞して、幌内炭鉱・幌内鉄道の払い下げを企図し、1889（明治22）年設立された北炭の官選による初代社長に就任。1892（明治25）年に、鉄道路線の無許可変更を理由に渡辺千秋北海道長官により引責辞任させられた。これは薩長間の派閥争いの現れとされ²、堀に同情する者も多く1894（明治27）年に貴族院議員に勅撰された。

ちょうしよひろたけ 調所広丈 (1840-1911)

元薩摩藩士。1872（明治5）年に開拓使出仕。札幌農学校（北海道大学の前身）の初代校長。1882（明治15）年に札幌県令に就任、その後は高知県・鳥取県知事などを歴任した。薩摩藩の財政改革の立役者である調所広郷は祖父（父とも）にあたる。

ゆちさだもと 湯地定基 (1843-1928)

元薩摩藩士。1869（明治3）年に藩命で渡米し農学

1 国立国会図書館「近代日本人の肖像」2013年（Web版）、日本国有鉄道北海道総局『北海道鉄道百年史』1976年などを参考に記述した。

2 1891年6月に内務大臣が西郷従道から品川弥二郎（旧長州藩士）に交代し、北海道長官も在任3年に及んだ永山武四郎から渡辺千秋（元諏訪高島藩士）に交代した。北海道は黒田長官時代から主要官員が薩摩閥で占められていたことから、品川大臣は渡辺長官を起用して薩摩閥の掃蕩を企図した。鉄道路線の変更自体は、鉄道庁長官・井上勝の調査によって妥当とされた。

を学ぶ。帰国後、開拓使に勤務し、のちに根室県令、北海道庁理事官などをつとめる。農業、特にジャガイモ栽培に尽力した。根室市に定基町、栗山町に湯地の地名が残る。

むらほしひさなり
村橋久成 (1840-1892)

元薩摩藩士。1865(元治2)年に薩摩藩からイギリスに密出国で派遣された15名の留学生の一人で、帰国後は戊辰戦争に参加。のち開拓使につとめ、北海道開拓事業の指導にあたる。開拓使麦酒醸造所の建設を東京から札幌に変更させた。1881(明治14)年に開拓使を辞して雲水となり行脚放浪し、1892(明治25)年に神戸で行旅死亡。

もりありのり
森有礼 (1847-1889)

元薩摩藩士。村橋久成とともに1865(元治2)年に薩摩藩留学生としてイギリスに派遣され、アメリカ経由で1868(明治元)年に帰国。新政府で外国官権判事などをつとめるが廢刀案を否決され辞職。1870(明治3)年に再出仕し、少弁務使(今日の公使、当時は大使は駐在していないので事実上の初代駐米大使と言え)としてワシントンに駐在し、黒田清隆の意を体して北海道開拓のアメリカ人技術者徴募を行いケプロンを見出したほか、新島襄(同志社大学の創始者)を政府派遣の留学生として認めるよう奔走した。1872(明治5)年に帰国後は、外務大丞・清国公使などを歴任する一方で、福沢諭吉・西周などと学術結社明六社や、商法講習所(二橋大学の前身)の設立に参画。伊藤・黒田両内閣で文部大臣をつとめる。

ごだいともあつ
五代友厚 (1836-1885)

元薩摩藩士。村橋久成・森有礼らを引率して薩摩藩留学生を率いてイギリス留学。新政府では、参与・外国事務局判事、外国官権判事、大阪府県判事を歴任する。1869(明治2)年に官を辞し、大阪で鉱山経営、藍の製造販売など実業に従事し、大阪株式取引所、大阪商法会議所、大阪商業講習所(大阪市立大学の前身)などを設立し、大阪の経済発展に貢献した。1881(明治14)年には関西貿易会社を設立して、開拓使官吏が設立した北海社とともに開拓使官営諸事業の払い下げを受けようとした(=北海道開拓使官有物払い下げ事件)ことが、いわゆる明治14年の政変³を引き起こす。

かばやますけのり
樺山資紀 (1837-1922)

元薩摩藩士。戊辰戦争では各地を転戦し、1871(明治4)年に陸軍出仕。1883(明治16)年陸軍少将のとき海軍大輔となり、海軍拡張計画を推進した。

1890(明治23)年山県有朋内閣の海相、続いて松方正義内閣にも留任し、藩閥政治を擁護した「蛮勇演説」をしたことで有名。日清戦争時に軍令部長、1895(明治28)年に初代の台湾総督となった。長男・樺山愛輔(かばやまあいすけ)(1865-1953)は、北炭では1910(明治43)～1912(大正元)年に取締役、日本製鋼所では1914(大正3)～1929(昭和4)年と1939(昭和14)～1941(昭和16)年に常務取締役・取締役役会長をつとめた。

まつかたまさよし
松方正義 (1835-1924)

元薩摩藩士。日田県知事、租税頭、大蔵大輔などを経て、1880(明治13)年内務卿となる。翌年、大隈重信が政変で追放されると、参議兼大蔵卿に就任。いわゆる「松方デフレ」と呼ばれる緊縮財政を実施した。伊藤博文・黒田清隆・山縣有朋内閣で蔵相、この間首相として2度組閣し蔵相を兼任した。日本銀行の創立、金本位制度の確立など、財政指導者として功績を残し、元老としても重きをなした。北海道での甜菜糖業の契機を作るが一時途絶、九男・正熊が正義の遺志を継いで大正期に再興する。

■お雇い外国人

ケプロン (Horace Capron/1804-1885)

アメリカの農政家。マサチューセッツ州に生まれ、陸軍士官学校卒業。南北戦争(1861-1865)で北軍として従軍して陸軍少将で退役、戦争により経営する農場が壊滅的な被害を受けたことから合衆国政府の農務長官となる。1871(明治4)年に渡米した開拓次官・黒田清隆の求めに応じて北海道開拓事業を助けることを決意し、開拓使の御雇教師頭取兼開拓顧問となった。同伴したお雇い外国人を統括し、自身も北海道内を巡視し、各種調査と開拓方針確立のために尽力した。在日期間は4年弱であったが、帰国に際して残した「ケプロン報文」で述べた西洋式農業経営や農学教育機関開設など提言の多くが実現した。

アンチセル (Thomas Antisell)

アメリカの化学者。1871(明治4)年にケプロンとともに来日し、地質工作舎密鉱山長に着任。ケプロンの秘書役でもあったが、仲は必ずしも良くなかったと言われている。専門の土壌・植物・肥料の分析にとどまらず、鉱山資源、農業、道路・港湾建設などにも広い意見を述べた。茅沼炭鉱への調査の途中、岩内付近で野生ホップを発見し、日本でも将来ビール産業が盛んになるという予見のもと開拓使にホップ栽培を建言した。1874(明治7)年に大蔵省紙幣寮に

3 参議大隈重信とその一派が政府から追放された事件。結果として、開拓使官有物払い下げは中止、10年後の国会開設が公約された。

移り紙幣用インキの研究・製造に従事し、1876（明治9）年に帰国。

ライマン（Benjamin Smith Lyman/1835-1920）

アメリカの地質技師。ハーバード大学卒業後、地質調査に従事し、後にパリの高等鉱山学校、ドイツのフライベルク鉱山学校に学んだ。1872（明治5）年に地質測量鉱山士長として来日。北海道の石炭などの有用鉱物調査を行い、北海道の地質図を作成した。幌内炭鉱は、ライマンが1873（明治6）年に実地検分し、翌年の炭層・炭質調査で有望性が確認され開発に踏み切った。1876（明治9）年に工部省へ移り、新潟・静岡などの油田調査を行うなど近代的資源調査法をもたらした。1881（明治14）年に帰国。

クロフォード（Joseph ury Crawford/1842-1924）

アメリカの土木技師。ペンシルベニア大学を卒業し、南北戦争では北軍の工兵大尉として活躍し、戦後はペンシルベニア鉄道などで鉄道技師としての経験を積んだ。1878（明治11）年に北海道開拓使の建築兼土木顧問として来日。幌内炭は、当初、資金難と張碓付近の断崖絶壁を理由に鉄道は幌内～幌向太（現在の豊幌駅北側の石狩川河畔）間にとどめ石狩川の舟運で運搬予定であったが、幌内から札幌を経て直接小樽まで敷設すべきという意見を提案し、自らアメリカへ資材買い付けに出かけるなど開通に奔走した。1882（明治15）年任期満了で解職。

■薩摩以外の北海道開拓関係

えのもとたけあき 榎本武揚（1836-1908）

旧幕臣。1856（安政3）年長崎海軍伝習所に入所。1862（文久2）年オランダ留学。1868（明治元）年海軍副総裁となり、江戸城開城後は官軍による軍艦の接収を拒否し、函館五稜郭で官軍に抵抗するが降伏。黒田清隆・福沢諭吉の尽力で1872（明治5）年出獄し、北海道開拓に従事。1874（明治7）年に海軍中將兼駐露公使となり、翌年樺太・千島交換条約を締結。その後、通信相・農商務相・文相・外相などを歴任した。語学に優れ、科学知識も当代一流であった。北海道の地質・物産の調査報告が多く、外地の視察報告もあって、科学・技術官僚としても注目される。1872（明治5）年に開拓使が北海道の開墾を積極的に進めるべく「土地払下規則」を發布し、榎本は北垣国道（第4代北海道庁長官）とともに小樽の土地20万坪を購入し、北辰社を設立して市街地開発を進めた⁴。

4 現在の小樽駅前長崎屋の港側を南北に通る小路の梁川通りは榎本の雅号「梁川」を、静屋通りは北垣の雅号「静屋」を由来としている。

つきがたきよし 月形潔（1847-1894）

福岡藩出身。京都で学び、新政府で司法省に出仕する。時の内務卿、伊藤博文の建議書に従い、北海道に重罪犯を収容する監獄を建設することが決まると、月形は場所選定から立ち上げに至るまで責任者（典獄：監獄所長）となる。樺戸集治監では囚人とともに開拓に当たり、現在の国道12号線の原型も月形が監督した囚人労働によるものだった。地元の住民との交流も盛んに行い、現在の樺戸郡月形町の町名は彼に由来する。

やまのうちていうん 山内堤雲（1838-1923）

元幕臣。母方叔父である佐藤泰然（1804-1875、高野長英に師事した医師で蘭塾・佐倉順天堂を開設し順天堂大学の基礎を作った）に学僕として入門し蘭学を修め、1867（慶応3）年パリ万国博覧会に通訳として随行、帰国後の箱館戦争では縁戚である榎本武揚軍に加わり禁固されるが、頭脳明晰さが黒田清隆に認められ、1873（明治6）年・開拓使に登用される。お雇い外国人調査報告書の翻訳を指導したことで知識を得て、1877（明治10）年には幌内炭鉱開発のマスタープランである「幌内煤田開削見込書」を作成。クロフォードや松本荘一郎の任命をアレンジした。1886（明治19）年の北海道庁設置を機に退官し、後に通信省会計局長、鹿児島県知事、製鉄所（八幡製鉄所）長官などをつとめた。

まつもとそういちろう 松本荘一郎（1841-1903）

明治時代の官僚・土木技術者、兵庫県播磨出身。大学南校に学び、1870（明治3）年に日本初の海外留学生として渡米して6年間土木工学を修め、帰国後は東京都に就職し同時に工部大学教授となった。1878（明治11）年、お雇い外国人土木技師を補佐する日本人技師として開拓大書記・山内堤雲に見出され開拓使に入り、クロフォードを助け幌内鉄道の工事を進めた。1884（明治17）年からは東京に移り全国の鉄道敷設に貢献、1893（明治26）年には「日本の鉄道の父」と言われた井上勝に代わり鉄道庁長官となった。長男は、商法学者で1945年（昭和20年）幣原内閣の憲法改正担当国务大臣・松本烝治。

ひらいせいじろう 平井晴二郎（1856-1926）

明治・大正時代の官僚・鉄道技術者、石川県出身。東京開成学校在学中の1875（明治8）年、第1回文部省留学生として渡米。土木工学士の学位を受けた後も、滞米してアメリカ陸軍省雇となってミシシッピ川治水工事などに従事して帰国、1881（明治14）年に開拓使御用掛を命ぜられた。松本荘一郎を助け幌内鉄道の建設にあたり、1884（明治17）年に松本が中央転出してからは幌内鉄道の技術責任者となり、

北炭になってからは鉄道延長線の建設を委嘱され作業にあたった。1894(明治27)年からは東京に転出し、松本の後を追う形で鉄道関係の要職をつとめた。在任中に手がけた建築物として、手宮駅機関庫や北海道庁旧本庁舎(赤レンガ庁舎)がある。

こむらじゅたろう

小村寿太郎(1855-1911)

日向の飢肥藩出身。ハーバード大学留学後、大審院の判事を経て外務省へ。外務次官、駐米・駐露公使を歴任。1901(明治34)年に外相に就任すると、日英同盟を結び、満州・朝鮮問題をめぐって日露交渉を担った。ポーツマス会議には全権として出席して早期終戦を実現するも、多くの国民から非難的となる。ポーツマス条約では、樺太の北緯50度以南を日本に割譲し、沿海州漁業権を許与することとなり、商業港としての小樽港の発展や、北洋基地としての函館港の発展につながった。1910(明治43)年には再び外相として韓国併合を実施する。

かねこけんたろう

金子堅太郎(1853-1942)

福岡藩出身。1871(明治4)年、岩倉具視の渡米に際し黒田家の海外留学生として団琢磨らと渡米し、ハーバード大学を卒業。帰国後は元老院で首相秘書官などを務め、明治憲法の草案起草にも参画した。日本法律学校(現・日本大学)の初代校長を務め、伊藤内閣では農商務大臣や司法大臣を歴任する。当時のアメリカ大統領ルーズベルトは旧知の仲で、日露戦争中の対米外交術(広報外交)は今でも評価されている。一方、太政官大書記官時代の1885(明治18)年に伊藤博文の命を受け道内を視察し提出した建白書では、開拓に囚人を積極的に使用し道路開削に集中すべきとした。

いわむらみちとし

岩村通俊(1840-1915)

元土佐藩士、1869(明治2)年に政府出仕、1871(明治4)年に島義勇の後任として開拓使判官となり札幌の開拓を推進。その後、佐賀県・鹿児島県・沖縄県の県令を歴任した後、司法大輔の在任中に北海道開拓の重要性を政府に説き北海道庁設置を働き掛け、1886(明治19)年に初代長官となる。永山武四郎とともに、上川への北京設置、上川離宮開設を建議した。

きたがさくにみち

北垣国道(1836-1916)

但馬国養父郡出身、幕末期の尊攘運動家。1863(文久3)年、生野代官所を襲撃した生野の変に参加し失敗すると長州に逃走、戊辰戦争に従軍する。維新後は、高知・徳島の県令などを経て1881(明治14)年京都府知事となり琵琶湖疎水や水力発電の事業を

完成し京都発展の基礎を築いた。1892(明治25)年、第4代北海道庁長官となり、井上馨内務大臣の諮問を受けて42箇条の答申をなした。特に、開拓の先駆は鉄道にありとして鉄道敷設に熱心で、北海道鉄道敷設法の成立や、女婿の田邊朔郎による鉄道の調査・建設に結実している。函樽鉄道(株)の設立にも関与し、国有化まで約8年社長をつとめた。

たなべさくお

田辺朔郎(1861-1944)

江戸生まれ。工部大学校(現・東京大学工学部)卒業後に京都府に採用され、琵琶湖疎水、蹴上発電所を完成させる。ほか、京都市の三大事業と言われた第二琵琶湖疎水、水道、市電の建設に大きく貢献したことで知られる。東京帝大、京都帝大の教授を歴任した。東京帝大時代、岳父で北海道庁長官を務めていた北垣国道に請われて調査・建設に従事し、1898(明治31)年には北海道庁鉄道部長に就任した。1900(明治33)年に欧米視察のため退職し、道庁に復帰しないまま京都帝国大学教授となった。

ひろいさみ

広井勇(1862-1928)

土佐国出身。札幌農学校(現・北海道大学)に2期生として入学し、内村鑑三や新渡戸稲造らと学ぶ。アメリカ、ドイツへの留学を経て、26歳で札幌農学校の教授に就任。1896(明治29)年に函館港改良工事監督に就き、コンクリートを用いた近代的港湾として整備する。1897(明治30)年に小樽築港事務所所長、1899(明治32)年に東京帝国大学教授。小樽港の北防波堤は、彼が開発した工法を用いて築港された、日本初のコンクリート製長大防波堤であり、荒波に耐えて100年以上経った今も現役である。近代土木・港湾工事の父と言われる。

ばんいちたろう

坂市太郎(1854-1920)

美濃大垣藩出身。東京の開拓使仮学校で学び、1876(明治9)年にライマンが北海道地質測量を行った際に随行する。ライマンは夕張での石炭存在を推定し、夕張川を遡行したが千鳥の滝(現在の滝の上)に行く手を阻まれ引き返した。工部省などを経て、1890(明治23)年に北海道庁の技師になると、夕張方面の探検隊を組織し、ついに1891(明治24)年に夕張の石炭大露頭を発見する。道庁退職後は、歌志内で坂炭礦を経営した。

■北炭関係

たかしまかえもん

高島嘉右衛門(1832-1914)

江戸生まれ。家業の材木業などに従事したが、江戸の後期、外国人相手の違法の金貨取引を咎められ牢

に入れられる。釈放後は横浜で材木業、建築業などを営み、日本最初の鉄道である汐留から横浜間の鉄道のために、横浜港の埋め立て工事を実行する。易断による占いも有名で、「高島易断」の名で知られる。1892（明治25）年に堀基の後任として北炭の社長に就任するも、翌年に辞任。社の人事も易断に基づいていたと言われる。

井上角五郎 (1860-1938)

備後国出身。慶応義塾を卒業後、福澤諭吉の指示で朝鮮政府顧問として朝鮮に渡る。1890（明治23）年からは衆議院議員を14期務めた。1893（明治26）年に北海道炭礦鉄道の常務取締役役に就任すると、薩摩閥の排除、飯場制度の改革、新炭鉱の開発など社内改革を進める。鉄鋼業の重要性に早くから着目し、1907（明治40）年に日本製鋼所、1909（明治42）年に北炭輪西製鉄場（現在の新日本製鉄室蘭製鉄所）を設立し、「鉄のまち室蘭」の礎を築いた。

福沢桃介 (1868-1938)

埼玉県生まれ。慶応義塾に入塾し、福澤諭吉に見込まれ福澤諭吉の二女ふさの娘婿となり、福沢の支援でアメリカ留学も経験する。1889（明治22）年帰国後に北炭へ入社。1893（明治26）年に免職（一説によると高島嘉右衛門の易職と出たため）となるが井上角五郎の理事就任により一ヶ月余りで復職。翌年には結核で咯血し北炭を退職、療養期間中に株取引で莫大な利益を得た。1901（明治34）年に井上の誘いで再び北炭に復職し、1906（明治39）年の退職まで、外債発行に関係するなど井上角五郎の片腕として活躍した。北炭の退職後は、木曾川開発事業や大同電力（現在の関西電力、中部電力、北陸電力の前身）の立ち上げなどで電力業界で活躍した。

山内万寿治 (1860-1919)

広島県出身、明治期の海軍軍人。平民出身者で初めて海軍兵学寮（のちの海軍兵学校）入学、主席で卒業。1884（明治17）年ドイツ・オーストリアに留学して兵器製造を研究し、山内式速射砲などを考案した。呉海軍工廠長、呉鎮守府司令長官を歴任し、主力艦国産化への道を開いた。日本製鋼所、神戸製鋼所など民間企業の育成に努め、1910（明治43）年に予備役編入後は、1913（大正2）年まで日本製鋼所会長をつとめた。民間鉄鋼業への貢献は大きかったが、機械兵器輸入商の高田商会やイギリスのアームストロング社などの業者との関係の深さも噂され、1914（大正3）年のジーマンス事件に関係して拳銃自殺を図り、起訴はされなかったが隠退した。

朝吹英二 (1849 - 1918)

明治時代の実業家、豊前国出身。1870（明治3）年に上京、福澤諭吉の書生となり慶応義塾に入塾。1878（明治11）年に莊田平五郎（1847-1922、慶応義塾で学び三菱に入り東京海上・明治生命などの設立を指揮し東）の紹介で三菱会社に入社、京丸の内のビル街建設を進めた。の紹介で三菱会社に入社、貿易商會を経て、1892（明治25）年に義兄の中上川彦次郎（1854-1901、慶応義塾で学び政府出仕、時事新報や山陽鉄道を経営した後に、三井に招かれ三井銀行・三井鉱山・三井物産の理事として三井財）の推挙で鐘ヶ淵紡績に専務取締役として入社。以後、三井呉服店・王子製紙など三井傘下企業の重役、三井合名参事などの重職を歴任した。北炭万字炭鉱は、1936（明治36）年に朝吹が所有する鉱区を買収して開鉱され、同家の家紋である卍にちなんで命名された。

頭山満 (1855-1944)

福岡藩士の子に生まれ、秋月の乱、萩の乱に呼応して蜂起、投獄された経験を持つ。その後自由民権運動に参画し、玄洋社を設立。アジア主義を唱えた大物政治運動家であり、政財界に大きな影響力を持ったことで知られるが、鉱山経営者としての一面も持ち、北炭は1905（明治38）年に頭山と金子元三郎が所有していたクリキ炭鉱の鉱区を買収し真谷地炭鉱を開鉱した。

金子元三郎 (1869-1952)

越後国に生まれ、松前の富豪であった先代の金子元三郎の養子になる。東京で学んだ際には、頭山満や井上角五郎とも交わる。水産業や海運業で財を成し、1891（明治24）年には中江兆民を主筆に「北門新報」を創刊。1900（明治33）年に初代小樽区長に就く。その後衆議院議員を3期、貴族院議員も務めた。定山溪鉄道社長や、北海道拓殖計画調査会委員なども歴任。現在、旧金子元三郎商店は小樽市指定歴史的建造物になっている。鉱山経営では、頭山とともに所有していたクリキ炭鉱（後の北炭真谷地炭鉱）の他に、単独で月形炭鉱の鉱業権も設定していた（1908～1912年、なお同鉱区は1890年に堀基が試掘権を設定している）。また、岩見沢の金子地区は、1894（明治27）年に北垣国道の勧めで200万坪の土地を開墾した金子農場があったところで、1937（昭和12）年に小作人に農地解放した。

団琢磨 (1858-1932)

福岡藩に生まれる。1871（明治4）年、14歳にして岩倉具視の渡米に際し黒田家の海外留学生に選ばれ、その後マサチューセッツ工科大学で鉱山学を修める。1878（明治11）年に帰国、東大助教授になったが専門の鉱山学を生かすことができなかったため、金子堅太郎の紹介で工部省三池鉱山局の技師になり、1888（明治22）年に三井に払い下げられると三池炭鉱社事務長を務めた。イギリス製排水ポンプの導入、

三池築港、三池炭利用による重化学工業化など、三池炭鉱の近代化を推し進めて日本を代表する大炭鉱に育て上げ、北海道炭礦汽船の三井系列化にも寄与した。三井合名理事長、日本経済連盟会理事長などを歴任したが、1932（昭和7）年に血盟団員の凶弾に倒れる。

いそむらとよたろう

磯村豊太郎（1868—1939）

中津藩生まれ。慶應義塾を卒業後、同塾教員、通信省、日本銀行などを経て三井物産でロンドン支店長を務める。北炭の経営が三井に移った後の1913（大正2）年、団に請われて北炭専務に就任し実務を取り仕切った。1930（昭和5）年社長に、1934（昭和9）年会長に就任し1939（昭和14）年の逝去まで会長職を勤めた。旧室蘭商工会議所ビルの5階講堂は磯村講堂と命名され胸像が置かれていた。

はぎわらきちたろう

萩原吉太郎（1902-2001）

埼玉県生まれ。慶応大学卒業後に三井合名に入社し、北海道炭礦汽船に移る。1955（昭和30）年に社長に就任すると、1982（昭和57）年まで長きにわたって同社のトップに君臨した。その間に児玉誉士夫や河野一郎らとも親交を結び「政商」と呼ばれる。しかし、国からの資金を得るための無理な出炭計画の策定は、結果的に幌内炭鉱や夕張新炭鉱などでの大事故につながったとも批判される。

まえだはじめ

前田一（1895-1978）

佐賀県出身。東京帝国大学卒業後、1921（大正10）年に北炭入社。総務畑を歩み、1946（昭和21）年に取締役就任。1948（昭和23）年の日本経営者団体連盟（（=日経連、現在の日本経済団体連合会））の発足に伴い同専務理事となり、1969（昭和44）年までつとめた。総評議長であった太田薫との春闘のやり取りは有名。戦後の労働運動の激化に対し、「経営者よ、正しく強かれ」とメッセージを残した。

おおつきぶんべい

大槻文平（1903-1992）

宮城県出身。東京帝国大学卒業後、1928（昭和3）年に三菱鉱業（（現：三菱マテリアル））に入社。三菱美唄炭鉱を振り出しに労務畑を歩んだ。1963（昭和38）年に同社社長に就任。エネルギー革命の中、大胆な人員整理を実施し「人切り文平」の異名を取るが、再就職の斡旋など穏健な策をとり、また石炭に代わる新規事業の開拓で財界からは高く評価された。1979（昭和54）～1987（昭和62）年には、日本経営者団体連盟（（=日経連、現在の日本経済団体連合会））の会長。

はらしげる

原茂（1920-2007）

昭和時代後期の労働運動家、北海道出身。北炭平

和鉱業所に入り、1947（昭和22）年・平和炭鉱労組委員長。1956（昭和31）年に日本炭鉱労働組合（炭労）委員長となり、1959（昭和34）～1960（昭和35）年の三井三池争議を指導。1961（昭和36）年9月には、政府の石炭政策を転換させるため石炭政策転換闘争を展開し、坑内作業着にキャップランプを着けた中央官庁や銀座でデモを行い、雇用促進事業団設立や炭鉱離職者求職手帳（黒手帳）導入など炭鉱離職者の救済策を具体化する後押しとなった。

■人物の連関…金子堅太郎の例

これまで列挙してきた人物たちは、互いに関連し影響しあいながら《炭鉄港》のストーリーを形成してきた。ここでは、その一例として、明暗二つの側面を有する金子堅太郎を中心に人脈を描いてみる。

薩摩閥の一掃を狙う長州勢は、開拓使を廃し、北海道を三県一局に分割した。しかし、開拓成果があがらないため、伊藤博文は金子に北海道の調査を命ずる。その報告書の中で、集治監における囚人労役の軽さを批判し、重労働を課すべき悪徒は苦役に耐えられず死んでも国費の抑制につながるとも記している。金子の建白を契機に、同様の考えを持っていた北海道長官・岩村通俊は、上川道路・網走道路など囚人に過酷な道路開削を命じ多くの犠牲者が出た。…暗

日露戦争のポーツマス講和会議で、交渉成立に向けて後方から協力したのは、ハーバード大学でアメリカ・ルーズベルト大統領と同級生の金子であった。金子の強力な後方支援もあって、全権である小村寿太郎は南樺太の割譲を唯一の賠償として獲得する。小村が生まれた飢肥藩は、薩摩藩に隣接する5万石の小藩で、軍事経済力では到底薩摩藩に太刀打ちできないことから、教育（交渉）に力を入れていた。列強の一角にあったロシアと対等に交渉し講和をまとめたことは、そのような環境の中で育った小村ならではとうなずける。樺太割譲によって、小樽港は飛躍の発展を遂げるのであった。…明

もう一系統、金子人脈で看過できないのは、団琢磨である。団と金子と同じ福岡藩出身で、アメリカ留学も理系と文系の違いはあったが同期であった。団は帰国後、金子の斡旋によって官営三池炭鉱へ赴任し、留学で得た技術知識をもとに、三池炭鉱を日本を代表する大炭鉱に成長させる。三池炭鉱は、三井に払い下げ

